3. プロジェクト研究 A　活動記録

[1]　本プロジェクトでは、通常の授業に加えて、下記のような活動を実施した。

①　2014 年 6 月 26 日（木）

NPO 法人高島平 ACT（Asian Community Takashimadaira）訪問

「高島平及びその周辺に在住している外国人住民と日本人住民の協働で、高島平及びその周辺地域の多文化化・多民族化を進め」ることを目ざす団体。本プロジェクトの担当教員である吉成勝男が相談役を務める。この団体が高島平団地内に開設・運営しているコミュニティ・レストラン「多国籍食堂 ハロハロ・グルメ」を訪問し、地域における交流の現状や課題についてヒアリングをおこなった。

②　2014 年 9 月 14 日（日）～18 日（木）

バングラデシュ・ダッカ市訪問

(a)かつて外国人労働者として日本に滞在した経験をもつビクラッププール地方出身の帰還移民 10 名にヒアリング調査を実施した。(b)IOM（International Organization of Migration 国際移住機関）のダッカ事務所を訪問し、バングラデシュにおける移住の現状や課題等についてヒアリングを実施した。(c)本プロジェクト研究の遂行に関して、記者会見をおこなった。（詳細は後述）

③　2014 年 12 月 15 日

NPO 法人 APFS 訪問

APFS（Asian People's Friendship Society）は、日本人と外国人が「共に助け合いながら生きる」ことを目的とした、相互扶助組織。本プロジェクトの担当教員である吉成勝男が 1987 年に設立し、現在も相談役を務める。板橋区大山にあるオフィスを訪問して活動の概要をヒアリングした。さらに、同団体が現在支援をしている 1 人の高校生のフィリピン人少年から、現在の自身の置かれている困難な立場（日本の生まれ育ちながら在留許可がない）について話を聞いた。

[2]　バングラデシュにおける調査について

プロジェクトの１年目である本年は、日本国内のエスニック・コミュニティと帰還者とのトランスナショナルな絆、移住者を送出した国（バングラデシュ）の変化、日本とバングラデシュの両国に関連する組織活動等を調べる第一歩として、国内では外国人居住者支援に関わる NGO（APFS、高島平 ACT）へのヒアリングを実施したが、一方、海外調査としてバングラデシュの首都ダッカ市を訪問した。バングラデシュは、1980 年代後半～90 年代に多くの人を日本に送り出した国の一つである。今回の訪問では、初発的な情報収集として IOM（International Organization of Migration 国際移住機関）のダッカ事務所を訪ね、バングラデシュから国外への移民の動向についてヒアリングをし、また、日本で外国人労働者として働いた経験のある 10 人に対するインタビュー等を実施した。インタビューの詳細については、次章に譲ることとし、ここではダッカ市訪問の概要についてまとめておく。

⑴ 出張概要

日時：　2014 年 9 月 14 日（日）～18 日（木）
出張先：　バングラデシュ　ダッカ市
出張者：
大学院生　　大野光子（後期課程学生）
教員　　水上・生井・野呂・吉成

⑵ 訪問先など

9 月 14 日（日）

夜、ダッカ国際空港に到着し、今回の調査を通してガイドを務めたカリム氏が用意した車で市内のホテルに直行した。空港正面出入り口の柵の外に群がって空港利用客のほうを見つめる多数の人びとが印象的。

9 月 15 日（月）

午前中に、ダッカ市内のプレス・センター（Dahaka Reporters Unity）で、本プロジェクト研究に関する記者会見を開催した。

会見場に向かう車窓から

記者会見場

記者会見においては、立教大学大学院のプロジェクト研究としておこなわれる本研究が、日本とバングラデシュの間を移動する人びとに関する調査研究のために大学と NPO（APFS）が協働する実践的なプログラムであること、今回の訪問を出発点として今後 2～3 年にわたり研究を深める予定であること、この研究を通して究極的には日本とバングラデシュの相互理解や交流を深める一助になることを希望していること、等を説明した。

たまたま、今回の訪問の直前に日本の安倍総理大臣によるバングラデシュ訪問があったこともあり、参加した記者との質疑応答では、日本の外国人労働者受入政策の今後に関する質問などが多く出され、この件

に関する関心の高さがうかがわれた。

午後には、市内の視察をおこなった。左の写真は、「ショヒド・ミナール」（Shaheed Minar）というもので、1952年に起こった「ベンガル言語運動」の犠牲者を追悼する記念碑。当時、同じ国家を形成していたパキスタンの言語・ウルドゥー語と対等の地位を要求した学生や活動家が警官隊の発砲により殺害されたという経緯がある。

この記念碑のレプリカが、立教大学近くの池袋西口公園内、東京芸術劇場のすぐ脇に設置されている。碑文によると、2005年にこの公園でバングラデシュの正月祭りが開催されたのを機に、両国の文化交流の象徴として、バングラデシュ政府から豊島区に寄贈されたものだという。（左写真）

ダッカの中心市街地から少し離れたところにある独立戦争記念碑。多数の犠牲者の流血により 1971 年に独立を達成したことを記念している。

中心市街地から少し西側に位置する国会議事堂。エストニア系アメリカ人の著名な建築家ルイス・カーン（Louis Isadore Kahn）の作品で、1974 年に完成した。完成までに 23 年を要したという。

ダッカの市街は、高層ビルの建築などが活発に進められ、慢性的に交通渋滞が発生している都心部では、モノレールの建設工事も始まるなど、随所で開発がおこなわれている。

一方で、左の写真のような風景も目に入るなど、コントラストが著しい。

中心市街へ入る鉄道の線路だが、多数の人びとの通行路になっていた。

9 月 16 日（火）

午前中、IOM（国際移住機関）のダッカ・オフィスを訪問し、バングラデシュから他国への移住の状況や課題等に関するヒアリングをおこなった。現在では、外国人労働者としての主な移住先はアラビア諸国などで、日本へは少ないという。また、受け入れ国側の態勢、出稼ぎ前の研修などについても話を伺った。（ヒアリングの詳細なまとめ資料の分析などは、次年度におこなう予定である。）

左の写真は、対応してくれたスタッフと一緒に撮ったもの。日本人の医師の女性も IOM のメンバーとして勤務していた。

午後は、旧市街に立地するラルバーグ・ケッラ（Lalbagh Kella）を見学した。インドのムガール王朝によるベンガル地方支配を伝える歴史的城砦で、1678 年頃の建設という。広大な庭園を伴っており、城砦の太守の娘を埋葬した廟、現在は博物館になっている謁見用の御殿、さらにモスクなどが配置されている。

9 月 17 日（水）

調査最終日は、午前中に市中心部から少し離れた郊外の街に出て、かつて外国人労働者として日本に出稼ぎに行き、強制送還などによりバングラデシュに帰国した経験をもつ 10 人の男性に集まってもらい、午後までかけてインタビューを実施した。その概要を、次章で報告している。

インタビューの風景。個人所有の 5 階建てビル屋上に覆いを設け、その下でインタビューを実施した。

インタビューの場をお借りした方の 5 階建てビルの屋上からみた街の風景（その人もかつて日本に出稼ぎした経験をもち、その時の稼ぎにより自宅兼用の賃貸住宅ビルを建てたという。）

インタビュー終了後に、市内中心部にある、巨大なショッピングセンターを訪れた。日本を含む多数の外資のショップが出店している。

[3]　今後の「人の移動」調査研究に向けての課題

プロジェクト研究１年目の2014年度は、協力関係を結ぶAPFSなどのNGOとの交流、移民の送り出し国であったバングラデシュ訪問と初発的なインタビューなど、文字通り準備の期間であったといえる。単なる通過ではなく定住を伴う人の移動は、実際にそれをおこなった人を起点に、送り出した地域や国、受け入れた地域や国、そして周囲の多くの人びとにさまざまな影響を与える。多額のお金が国家間を往来することによる経済的な影響をはじめ、政治・政策への影響、異文化間の交流と摩擦、人間関係やコミュニティへの影響、等々挙げ尽くせないほどである。私たちは、今回、そうした一連のダイナミックな現象の表層のごく一部に触れることができたという感がある。

しかし表層の一部のみでも、文字だけではなく視覚や聴覚なども通じて得られた情報量は膨大であり、消化しきれないほどである。今後は、深層に分け入って追求すべきテーマ、論点をいくつか見定め、このプロジェクト研究だからこそ可能になる方法論を確立し、具体的研究に取りかかる必要がある。おそらくはその際、常に「人」に照準を合わせ続けるミクロ的な視点が大事になるだろう。複数の立場の人びとの経験してきたことに関する情報を丁寧に収集し、それら諸経験と相互に関連し合う経済や政治、社会の諸制度の作用や変化について、体系的に理解を進めるという道筋が考えられそうである。

プロジェクトの共同研究であればこそ可能になる構成メンバーの役割分担、協力のあり方について、より明確な見通しを立て、2年目の具体的な成果の達成につなげたいと思う。

（本レポートをまとめるにあたり、当該機関のホームページ、バングラデシュやダッカ市に関する複数の観光案内のホームページやブログ等を参照した。）